

第 7 1 回 近畿地区大学建築系学科
卒業設計コンクール応募作品一覧

平成29年4月12日
日本建築学会近畿支部

No.	作 品 名	学生氏名	大 学・学 科	図面枚数
1	白浜町湯崎の坂のシークエンスを活用したまち宿計画	中野友梨乃	近畿大学 建築学科	28
2	水際へのまねき	小林星麗菜	帝塚山大学 居住空間デザイン学科	8
③	島の守 —成ヶ島における堤防型ミュージアム—	斎藤 愛	神戸大学 建築学科 (建築デザイン)	7
4	一世の終に見る現と夢	森川 将雄	摂南大学 建築学科	8
5	ハゼ場の景	松井 一泰	和歌山大学 環境システム学科	5
6	あがまちコモンズ —地域をつなぐ集合住宅—	立川 歩	武庫川女子大学 生活環境学科	4
7	あるいは、『サロメ』への廻行 —HOMAGE TO MAKI KUSUMOTO, AUBREY BEARDSLEY AND OSCAR WILDE—	岩下由加梨	大阪芸術大学 建築学科	2
8	むすんで、ひらく —粟生駅における北播磨の観光の拠点計画—	西村 美里	兵庫県立大学 環境人間学科	6
⑨	原木せりと水中貯木場 ～木がつなぐ水辺の風景～	栗野 瑞基	大阪工業大学 空間デザイン学科	11
10	Senidipity<センイディピティ> —浜松卸商団地を再生する—	笠原 若菜	奈良女子大学 住環境学科	8
11	ちいさな賑わいのその先に ～居ることを楽しむまちの構築～	坂上みなみ	神戸芸術工科大学 環境デザイン学科	6
12	街の器 —図書館等複合施設による街づくり—	中満 夏実	立命館大学 建築都市デザイン学科	8
13	バーミヤン 仏教寺院 復元設計計画	白原 綾乃	武庫川女子大学 建築学科	6
14	金沢水景 (ひとつの風景、五の水景、百の舟、千のうつろい、万の人びと)	善岡 亮太	京都大学 建築学科	9
15	知識の伝承	谷出 栞里	摂南大学 住環境デザイン学科	9
16	理想郷を求めて —殺処分ゼロを目指す動物保護施設の提案—	北村 希美	滋賀県立大学 生活デザイン学科	1
17	海に向かって生きる街～おばあちゃんの街を長生きさせるために考える3つのこと～	中畑 美咲	京都工芸繊維大学 建築Ⅱ	10
18	備讃瀬戸の駅 —香川県高松市サンポート地区複合ターミナル計画—	石丸 怜奈	神戸大学 建築学科 (都市デザイン)	9
19	Self construction unit	平井 俊充	大阪産業大学 建築・環境デザイン学科	4
20	animato	玉島 美侑	京都女子大学 生活造形学科	5
21	浮かぶめぐる暮らし	名倉 麻実	大阪市立大学 居住環境学科	10
22	地ト空ト火ト音ノ場	田中 俊之	京都府立大学 環境デザイン学科	15
23	結楼 グローバル社会において、外国人と街を融和させる住環境の提案	Jongmin Oh (オ ジョンミン)	関西大学 建築学科	12
24	リノベーション建築の再デザイン 軍都の記憶	中道 健太	京都工芸繊維大学 建築Ⅰ	6
②⑤	Re:construction 消費としての生産による都市の更新	松山 力哉	大阪工業大学 建築学科	8
26	蛙街	下寺 孝典	京都造形芸術大学 環境デザイン学科	10
27	すみか	谷 玲実	成安造形大学 芸術学科	3
28	建築が生まれる時	安平 雅史	大阪大学 地球総合工学科	5

(受付順) 以上28点<No. 欄に○印のものは入選作品>

日本建築学会近畿支部
平成28年度近畿地区大学建築系学科
卒業設計コンクール（第71回）審査報告

審査員長 大澤 智

平成29年4月12日（水） 審査会場・大阪科学技術センター（6階605号室）

審査員長（互選） 大澤 智

審査員 大平 滋彦・神戸嘉也・楠 敦士・小牧 実豊・平井 浩之・宮本 雅弘
(50音順)

応募作品 28点（別紙参照）

審査経緯

審査員は設計事務所、ゼネコン設計部所属の計7名で構成され、厳正公平に審査をし、応募28作品から入選3点を選出した。力作も多く選出は3次審査にまで及んだ。本年は、応募作品が多い一方、質が高いものと低いものの差が大きかったことが特徴である。

1次審査として、審査員各自が全作品を審査し、各自6作品を選出した。集計の結果、作品No.9が満票を獲得した為、暫定的に入選とした。5票を獲得した作品が3点、4票を獲得した作品が3点、3票を獲得した作品が1点、1票を獲得した作品が5点、0票の作品が15点あった。ここで、0票のものを落選とした。

2次審査として、審査員が作品の前に集まり議論するスタイルで審査を進めた。1票獲得の作品について、選出した審査員が選出理由を述べ、全員で審議した。次に3、4、5票獲得した作品を囲み、審査員が、評価する点と残念な点を作品1点ずつ確認した。5票獲得した作品を全員で審議した後、1票獲得した作品と3~5票獲得した作品の間に歴然と差があることが確認され、1票獲得の作品も全て落選とした。満票獲得した作品No.9についても全員で再確認し、入選を確定した。

5票獲得の作品レベルが高かったため、3~4票獲得の作品から、5票獲得の作品と同レベルで最終審査に持ち込むべきものを審議した。結果、論理的に考察されている作品No.3が繰り上げられ、5票獲得の作品No.12、No.22、No.25と合わせ、4作品の中から2点入選作品を選ぶこととした。

3次審査として、4作品をならべ、それぞれの作品を確認後、各自2票 挙手にて選出を行った。6票獲得のNo.3と5票獲得のNo.25の2点を選出した。No.22は、3票と僅差で入選を逃したものの、作品の完成度、提案内容共、入選作品とほぼ同レベルのものであった。作品No.12は、上位に入った唯一の建築単体の作品であったが、建築形態の場所性と一歩踏み込んだ提案が読み取れず、入選を逃した。

今回 票を獲得した作品は 都市的・街づくり的なアプローチの作品が多く、建築単体に正面から取り組む作品が少なかった。時代の流れかもしれないが、少し残念な気がする。

入選した作品は、卒業設計らしく、しっかりとした調査や深い考察がなされた上で、各自の個性を作品に生き生きと表現し、図面のプレゼンテーション力もあり、完成度の高いものばかりであった。

(大澤)

審査概評

昨年に引続き審査に参加したが、全体の印象として、コンセプトワークやダイアグラムなどを用いて巧みに表現した完成度が高いものがある一方、建築や空間のデザインに昇華しきれていないものやソフト寄りの提案になりがちなものも多く、「建築系学科卒業設計」としては、やや物足りない印象を受けた。

審査にあたっては、応募 28 作品について各審査委員が 6 作品を選び、得票があった作品について審査員相互で議論を行い 5 作品に絞り込まれた。その中からまず「原木せりと水中貯木場」が選ばれ、残り 4 作品について再投票の結果、「島の守」「Re : construction」が選考された。

選ばれた 3 作品はいずれも、明快なコンセプトやプログラム設定、具体的な建築や空間のデザインへの昇華、質の高いプレゼンテーションにより、総合的に優れた作品として評価された。

惜しくも選にもれたが、「地ト空ト火ト音の場」も非常に完成度の高い卒業設計らしい作品で、入選に値する作品であったことを付け加えておきたい。

(楠)

島の守 —成ヶ島における堤防型ミュージアム—

齋藤 愛君 (神戸大学)

一見 シンプルな絵画的な形をしており、流行に流された作品にも見えたが 詳細に見ていくと

作品の題である「島の守」を非常に明快にかつ素直に表現できている作品であることがわかる。

津波ハザードマップに基づいた流線形の形態操作を行い形態を決めるその緻密さがこの作品が単なる感性で創られたものでないことがこの作品の完成度と好感度を上げている。

成ヶ島の原風景から空間を導くとともに、壁により仕切られた外部と内部とをつなぐあいまいな中間領域空間を 様々なヒエラルキー レイヤーの重なりによりあいまいに緩やかにつなげている。そのつながりが人々の絆をも強めていると読み取れた。

柔らかく包み込むA 0 サイズ 3 枚にわたるドロ잉が 堤防という無機質なものに命を与え この施設のあるべき姿を素直にかつ巧みによく表現している

堤防が単にその用をなすのではなく そこにミュージアムという用途を与えたことは現代に一石投じる新鮮な作品であると共に 情報整理→分析→コンセプト→設計デザイン→表現・プレゼという一連の設計作業をトータルで素直にまとめきれている秀作といえる

(平井)

原木せりと水中貯木場 ～木がつなぐ水辺の風景～

栗野 瑞基君 (大阪工業大学)

詩的なタイトルが示すように、材木と水を媒介として新たな水辺の風景を描き出そうという試みである。大阪市沿岸部の平林と大正の二つの衰退しつつある貯木場を計画

敷地とし、そこを原木のせり会場を中心としたコンプレックスに更新し、二つの敷地を結ぶ水路に船（これも移動する敷地に見立てたものである）を回遊させ、せり市場の文化を未来に継承するという計画である。水辺の既存インフラに着目し、新たな材木の流通サイクルや誰もが利用できるオープンな「せり」のシステムを生きるものとして再構築することにより、水辺が有する空間の魅力を最大限に発揮できるような提案が行われている。あえて原木を意識させるような柱・梁による即物的な建築表現もさることながら、作品の読者に対する過剰とも取れるサービス精神のようなものがこの作品の魅力となっている。その詩的な世界観が、敷地の位相や建築のスケール感を大小巧みに織り交ぜながら丁寧に解き明かされており、設計者としての腕の良さを感じさせられる作品となっている。

(宮本)

Re:construction 消費としての生産による都市の更新

松山 力哉君 (大阪工業大学)

かつて職住混合の町工場の町として栄え、現在は空き家や防災面で課題を抱える木密の都市が更新されていく50年に及ぶ物語である。

木造住宅が密集するがゆえに再開発もままならない工場町に「間引き」の手法を採り入れ、間引いた(=消費)木造住宅の建材や家具を資材として加工する(=生産)町として変貌を遂げていく。間引かれた空間はパッサージュとして新しい町の核となり、30年後には駅周辺に集約的に住まう人々の教育・レクリエーションの場、50年後には都市生活者のための自然環境豊かなアクティビティの場となる。

建築的には垂直方向にも展開される間引きや、仮設的な手法を用いてアクティビティの場をつくるという引き算の手法が主であり、新たに挿入されるのは立体格子と「プラグ」というユニットだけであるが、風通しの良い職・住・遊の空間が新しいライフスタイルの都市をつくりだしている。

木造住宅密集地域を貴重なストックと捉え、モノ・人・技術の力で生産力のあるコンパクトシティへと更新させる構想力は秀逸であった。そこで繰り広げられる都市更新の物語へと見るものを引き込む、水彩画のようなタッチのパースや図面の表現力も優れている。

(小牧)